みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第228号
発行者
茨城県学校長会
会長　吉澤　一喜
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933－1
教育プラザいばらき内
☎ 029－269－1300
FAX 029－269－1304

特集1 新年度に備えて
特集2 危機管理体制の整備と学校安全の確保

環境・エネルギー講座（レモン電池）

水墨俳画講座

フラダンス講座

茶道講座

「地域人財」とのふれあい

水戸・常磐小　礒田　洋

コミュニティースクールである本校は様々な場面で「地域人財」（宝という意味で材でなく財を使っている）に支えられている。写真は「一本杉ふれあいの集い」の様子。併設市民センターや近くの県生涯学習センターの各講座や企業の方々などの名人先生の指導で二十二講座を開設した。囲碁将棋やフラダンス、紙飛行機、ヨガ、太極拳、なぎなた、水墨俳画など普段の授業ではできない体験に子供たちは目を輝かせて没頭した。体験を通して、地域の方と顔見知りになり、やがて地域コミュニティーの中心となる子供が育つことも期待したい。

目次

○表紙写真に寄せて……1
○特集一「新年度に備えて
　－我が校の課題－」…2
○課題「小中の接続と学びの連続性」…5
○特集二「危機管理体制の
　整備と学校安全の確保」…6
○提言二題……8
○特別寄稿「日々の活動の大切さ」…9
○研修報告「全連小・全日中」…9
○ひばり……10
○読んでみませんか……11
○梅のかおり……12
○市町村教育委員会と学校長会…14
○編集後記……14

特集1
新年度に備えて
―我が校の課題―

本年度の実践を継続発展させて

小美玉・玉里小　米川　博美

本校は、小美玉市の西部に位置する自然に恵まれた環境の中にある。二百七名の児童は、職員の熱心な指導をうけ、明るく伸び伸びと元気に毎日を送っている。

来年度は、本年度の実践を生かしながら次の点を中心に取り組んでいきたい。

一　表現力の向上

本年度、校内研究教科を生活科・理科とし、言語活動と学びあいに視点をあてた研究を進めた。言語活動では学習過程で児童の思いを表現させる、ノート指導や板書の工夫などを行った。学びあいでは、場の設定や話し合いのさせ方の工夫を行った。これらにより、児童の表現力向上に一定の成果を見ることができた。来年度も、言語活動と学びあいを大切にした授業の中、より一層の表現力向上を目指し、学力向上に繋げていきたい。

二　自ら行動できる児童の育成

これまで、挨拶について多くの保護者・地域の方々からお褒めの言葉を戴いてきた。毎朝遠くから大きな声で挨拶してくる児童から、たくさんの元気をもらっている。本年度は、児童が考えた「玉里しぐさ」ができた。来年度は、その具現化の中で、児童の自己実現の場の設定を意識しながら、自ら進んで行動できる児童の育成にさらに力を注いでいきたい。

三　健康・体力の向上と応援される学校づくり

本年度体力テストA＋Bの結果は七十八・六％である。毎朝のランニングの成果か、持久走記録会では十七人もの児童が新記録を出した。早寝早起き朝ごはんの定着も進み、う歯治療率も大きく向上している。二学期末保護者アンケートでは、よい評価をいただくことができ、喜びを感じている。職員の努力が結果を導き出したと思う。

来年度は、研修の充実を中心に継続的な実践を進めていく。児童の成長を目標に、職員一丸となって、本年度の実践をさらに大きく実らせていきたい。

知徳体の調和のとれた教育活動を目指して

東茨城郡・長岡小　谷津　照夫

本校は、水戸市の南部に隣接する全校児童四百六名の学校である。昨年度、創立百四十周年を迎えた長い歴史を有する。

新年度に向けて、次のような取り組むべき課題がある。

一　学力の向上

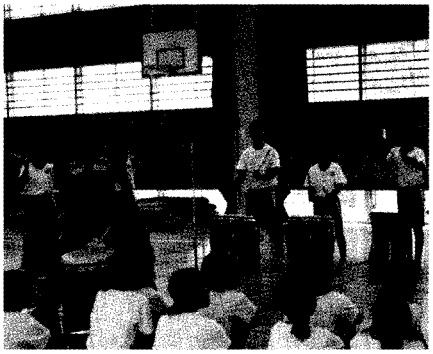
今年度は、「算数科の基礎・基本の定着を目指して」というテーマのもとに訪問指導等を頂きながら校内研修を進めてきた。しかし、まだまだ十分な研修には至っていない。そのような中で、テーマに迫るための課題は明確になってきたと言える。次年度も同じテーマのもとで明らかとなった課題を確実に克服していくことにより、教師一人一人の指導力を向上させたい。そして、算数科での研修を通して教科指導全般で教師の指導力を向上させ、児童の学力の向上に繋げていきたい。

二　豊かな心の育成

本校の特色ある教育活動の一つとして、様々な分野での専門家をゲストティーチャーとして招き、本物に触れる感動を体験させている。次年度も書道、絵画、珠算、和太鼓、合唱、アルトリコーダー、陸上、農業体験等の指導に生かしていく。数多くの感動の場面を設けることにより、心豊かな児童の育成に取り組んでいきたい。また、これらの専門家の方々が、限られた時間の中で児童の心をつかみ、目標に到達させる指導法は、私たち教師にとっても大いに学ぶべきところがある。

三　健やかな体の育成

平成二十二～二十四年度にかけて、県の「体育大好き推進事業」の指定を受け、児童の体力の向上に取り組んできた。その成果が、体力テストの結果に確実に現れている。次年度においても児童が主体的に運動に親しむ態度の育成を図りながら、体力の向上に努める。一方、「児童が健康で安全な生活を送る」という点では今年度の児童の様子から課題として感じられた。次年度に向けて今年度中に対策を講じ、自ら健康で安全な生活を送るための実践力を育てていきたい。



今年の課題を踏まえて一歩前進

日立・油縄子小　窪木　雅啓

本校は、読書活動の充実に組織的に取り組み、昨年度、文部科学大臣賞を受賞した。全児童五十冊読破が六年間連続しており、さらに質の高い読書を求めて教師や高学年児童によるブックトーク、教科や領域との関連を工夫した指導などが行われている。ここ数年間の取組で、特色ある活動として定着してきた。そうした活動を基盤に、さらに一歩前進するために今年度

「いいとこのばす学校」を加え、「未来パスポート」を活用して、担任と校長、さらに家庭が連携して児童のよさを認め褒める活動を展開してきた。これは、「できるようになったこと」や「みんなのために頑張ったこと」を担任との面談を通して「未来パスポート」に記録し、三つ記録できたら校長室で報告。児童には、校長より賞賛を与えるとともに副賞を渡し、そのことを家庭でも報告、家族からも褒めてもらうというものである。校長室で報告する児童は実に生き生きとしており、保護者からの評価も高い。二学期末の時点で報告に来た児童は三分の一程度。担任と児童とのふれあいの時間を確保し、児童のよさを伝え合う職員のコミュニケーションを活性化させながらこの取組をさらに充実させていきたい。

二　ユニバーサルデザインの視点からの授業改善

今年度、もう一つ重点として取り組んできたのが、ユニバーサルデザインの視点に基づく、「全員がわかる授業づくり」である。これまでも確かな学力を身に付けさせるための授業改善は行われてきたが、授業になかなか参加できない児童への支援が不十分であるとの反省があった。年度途中、授業後の協議を充実させ今後の改善に生かすために、ワークショップ形式や授業の相互評価を取り入れた。授業の優れた点や改善すべき点がこれまで以上に明らかになり、厳しさはあるものの授業力の向上につながると教師の評価は高い。次年度、この取組を一歩前進させていきたい。

一　「いいとこ発見夢づくり推進事業」の積極的推進

この事業は、児童・生徒が自分のよさに気づき、自己肯定感を高めながら、未来を切り拓いていく力を高めようとする、日立市の全市的な取組である。

本校では、学校の目指す姿に取り組んできたことが、自己肯定感を高めるための取組である。

幼小中公の連携で育む人づくり

鹿嶋・高松中　内芝　秀美

本校は、生徒百五十二名の小規模な中学校です。立地する地域は鹿嶋市東部の鹿島港に接し工場関係者が多く往来する地域ですが、農業調整区域が多く緑の多い所でもあります。もう一つ特出すべき点は、幼稚園・小学校・中学校・公民館までが隣接している点です。

その中で本校の大きな課題は、生徒数の減少に伴う活気の低下です。なんとなく生徒たちは声が小さく字も小さい。部活動の成果も行事の活気も低迷してくる、通学路が寂しく危険だと指定校変更者が出てくる等の現象がみられます。

そこで、経営方針には生徒の自信や自尊感情を育て、活力のある学校づくりを目指すことを第一に掲げ、そのためにキャッチフレーズ「自信は声から」を設け、全職員で生徒が明るい気持ちで生活できるよう取り組んでいます。

それから、この学校教育を確かなものとするため高松小学校長及び高松幼稚園長と共に、高松人づくりの木の根幹となる「しっかり勉強する人づくり」のプランを創り、揃って家庭と地域に働きかけています。

この木の大きな枝となる学力向上面では、小中連携カリキュラムの開発研究に着手し、教職員研修を推進しています。

また、別の枝では交流活動を共同立案させ、あいさつ運動、小学校運動会と中学校文化祭への相互出場、合同陸上練習を継続実施しています。この活動を通して、中学生には地域の縦のつながりや子ども世界のリーダーとしての自覚と自信を育てるようにしています。

次に、地域連携の枝では、今年度初めて、住民との合同体育祭を生徒たちも参加して共同立案し実施させていただきました。当日は生徒の倍ほどの住民が集い、盛大な体育祭を展開することができ、生徒たちにとっては大きな自信を生みました。

他の枝では、合同避難訓練を始め幼稚園や地域でのボランティア活動を継続し、地域に根ざす子どもを育んでいます。

次年度も、活力ある高松っ子を育てるために、この幼小中公の連携を校長として率先推進し、人づくりの大きな木を育てていこうと考えています。

創立三十周年の歴史と伝統
―足場を固めて―

龍ケ崎・城西中　塩幡　克三

本校は、昭和五十九年創立、平成二十五年度に、開校三十年を迎えた歴史と伝統のある学校である。生徒数三百六十九名、十三学級の中規模校であり、地域の方々の学校に寄せる期待は大きく、学校に協力的な土地柄である。

PTA活動が活発であり、学校の周りの桜の木や中庭のケヤ

キの木など、体育祭や合唱祭でバザーを行い植樹した。また、「おやじの会」の方々が、夏休み中に駅付近で巡回指導し、支援してくれている。

本校は、開校当初から生徒会活動が活発であり、学校校則や学校生活の見直しの全校フォーラムを実施したり、小貝川や佐貫駅前の清掃活動や募金・福祉活動をしたり活躍してきた。

この三十周年を節目に、教育活動を振り返り、その目標達成の手段として「交流」を位置づけ教育活動を展開したい。

一　行事を通しての異学年との交流

体育祭は縦割りで集団を編成し、各学級の協力体制と人間関係づくりを図る仕組みを構築した。三年生の修学旅行では、一年生が「いってらっしゃい」二年生が「お帰りなさい」、三年生が「おおきに」メッセージで交流した。

二　龍の子サミットでの学校間交流

市内六中学校の生徒会が本校に集い、「未来の中学校」についてパネルディスカッションした。本校生徒の意識を高め、「輝け城西」を目指した生徒会活動の運営の仕方の示唆を得た。

三　地域との交流

吹奏楽部の演奏交流、小貝川の花運動での交流、幼児との触れ合い交流等、地域に出かけ地域から育ててもらうという意識を重視する。

今学校は、大規模改修工事中であり、新校舎のために強固な足場が組まれている。校舎建築のように、先を見通し教育活動を展開したい。

教師の研修意欲と指導力を高める校内研修の推進

取手・寺原小　猪狩　朋子

本校では昨年度から「考えや思いを豊かに表現できる児童の育成」をテーマに、数学的な思考力・表現力を育てる授業づくりに取り組んできた。当然のことながら、児童の学力の課題は教師の指導力の課題であり、総合的な力を付けた教師の質の高い教育活動が不可欠である。そこで、児童の学習意欲の喚起と、学習の見直し及び振り返りを大切にして、次の三点を中心に次年度の研修の推進を図りたい。

一　学力向上の基盤となる共通理解

研究授業を重ねるにつれ、研究テーマとして掲げた「思考力」に対して個々の教師の認識にずれが見られたため、まずはテーマにおける「思考力・表現力」等についての概念定義を明確にしていく。それを基盤にした校内研修を推進するため、目指す目標と評価基準の共通理解を行い、組織的な取組にする。

二　研修の成果を生かした研修方法の改善

提案授業は各学年ともに、同じ単元の内容を前後して行い、先に行った授業に改善を加えて練り上げた授業展開を工夫している。また、上学年・下学年ごとに指導案検討、授業前の模擬授業、授業後の研究協議を通し、成果と課題を明確にして研究授業後の授業改善に繋げている。

今後、数学的な思考力の育成のため学習内容の関連をより重視し、練り上げの幅を広げ、思考の連続性と発展性を重視した積み上げを図っていく。

三　校内研修と連動させ主体的な取組を促す工夫

研究協議で見えてきた改善方法を次の研究授業まで生かさないというのでは、児童の学力向上に繋がらない。取組を日常化するからこそ成果が実感できるのであり、実践の評価と改善のサイクルが教師の研修意欲と指導力を高める。授業研究を中心とした校内研修に連動させ、学年やブロックでの日常的な研修で成果や課題を共有し、チームによる達成感を味わわせたい。

児童の意欲を引き出す魅力的な課題の開発、課題解決のための効果的な学び合いなど、本校の学力向上の取組はまだ課題山積であるが、常に学び続ける姿勢で取組を推進する。

「八千代を支える人材育成」を目指して

結城郡・西豊田小　舩橋　敏行

本校は、田畑が広がる農村地帯で緑も多く、自然豊かな学校である。全児童数三百十名、学級数十二の中規模校である。ここ数年は食育に力を注いできた学校でもある。保護者は非常に協力的である。児童は明るく素直である。学力では、「伝え合う力」「書く力」「数と計算」「図形」に課題がある。生活面でも個々に課題が見られる。

本校教育目標「八千代を支える人材育成」から不足している力をつけさせるには何かを考え、今年度は、「学力向上」と「ボランティア活動」の二つを重点とし、取り組んできた。

〈学力向上〉

昨年度より町教育委員会・町教育研究会より研究指定を受け、算数科における「言語活動」を中心にした研究に取り組んできた。実質的な研究は、三年前より始め、初年度が「聴く」、次年度が「話す」、本年度が「伝え合う」こととし、授業改善に努めてきた。はじめに児童の言語活動を中心として取り組んだ。自分の意見を自分の言葉で伝え合うためにどのような手立てが必要か検討し、言語活動に

ついてのDVDを使ったり、話し合いのためのシナリオを作成したりと研修を重ねてきた。結果として、児童の言語活動の力がついてきた。また、手立てを講じることで児童の反応が大きく変わることが分かり、指導者の意識も変わってきた。そのほかにもノートの使い方を統一したり、多くのプリントを用意し、繰り返しをしたりすることで基礎基本の定着を図った。

〈ボランティア活動〉

あいさつ運動、あいさつボランティア隊、朝の庭掃除などに取り組んできた。

次年度は、生活課題を明確にし、子どもたちのさらなる向上につなげていきたい。そのために教職員が一丸となって、地域を支える人材となるよう今後も努力を続けていきたい。

課題

小中の接続と学びの連続性

県学校長会副会長　矢口　和美
（つくば市立竹園東中学校）

本年六月十九・二十日に関東甲信越地区中学校長会茨城大会が開催される。全体協議題につながる、研究の視点は「学びや育ちの連続性を意識した中学校教育の創造」である。

本県では、多くの市町村で小中連携や小中一貫教育を推進しており、様々な実践が試みられている。ともすれば、

○小中連携と小中一貫の違いは何か。
○時間と学校間の距離で難しい。
○指導要領があるので、連続性は保障されている。

等々、本質とはかけ離れた論が展開されがちであるが、中一ギャップから見える子供の教育の現実的な問題に対応する具体策はなかなか論じられないことが多い。

学びのイノベーションこそ、子供の育ちや保護者や地域住民の方々の期待に応えられる術と考えれば、小中連携や小中一貫教育はその要求に応えられるひとつの実践ではないかと思う。

まず実践してみることが大切である。実践しなければ課題も見えないし、次なる展望も明らかにならない。

百聞は一見に如かず。先日、視察させていただいた姫路市では、「魅力ある姫路の教育創造プログラム」の中に「校種間連携強化」を設定し、小中一貫教育を実践している。

呉市では、小中一貫教育を通して、子供の連続した学びと自尊感情の向上を目指した実践を行っている。

小中一貫教育の課題は

一　何をどのように学ばせていくのか
二　何を学び、どのように連続させていくのか
三　学びを通して、どのようなスキルを身に付けさせるのかである。

つくば市では、教育課程特例校の指定を受けて

一　つくばスタイル科での八つの内容の実践（環境、科学技術、国際理解等）
二　「学びのスキル系統表」活用や「考える時間」の設定等独自の取組
三　つくば次世代スキルの習得

を目指して、各学園（各中学校区を学園と称している）ごとに実践している。

小中の接続と学びの連続性、つまり小中連携、小中一貫教育は、学校における「不易と流行」の課題であり、それは「学びのイノベーション」とスパイラルに絡んでくる。現状の課題を明確にし、情報交換を深める必要がある。

学びの共同体づくりに向けて

猿島郡・五霞東小　吉岡　誠一

子どもも職員も一人一人が、互いの関わりの中で成長し、楽しく充実した毎日を送れる学校を作りたい。

これは、誰もが願う学校の在り方で、当たり前のことだろうと思います。

それなのに、この当たり前のことを、学校経営のビジョンとして打ち出したのは、向かう方向と理想とを、教職員とそしていずれは子どもたちと共有したいと願ったからです。

この理想とする学校を作るために、二十五年度は手探りの年、二十六年度は挑戦の年、二十七年度は更なる挑戦の年と考えました。

今、各学級でグループやペアによる学びが始まっています。また、ほめ言葉のシャワーにも取り組んでいます。しかし、この取り組みは手探りの取り組みであり、誰もが分からないことだらけです。

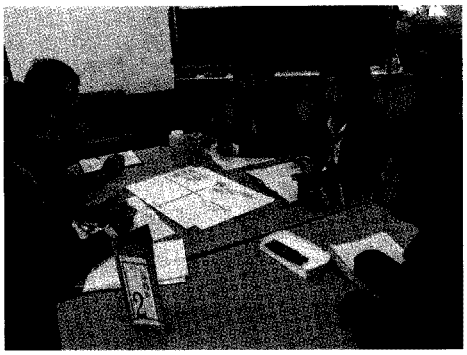
授業を参観し、教師の立ち位置についてアドバイスすると「そういうことが、よく分からないんです。」の言葉や、校内研修会後の職員室で「授業を見る視点や子どものどんな姿に注意したら良いんでしょう。」等の言葉が聞こえるようになってきました。

これらの姿や雰囲気を教頭が察知し、「授業の見方のポイントを教わりたい。そのポイントは指導のポイントにもなるはずだから。外部講師を招いて研修をしたい。」との提案がありました。二月上旬には校内研修を実施したいとして、教頭・教務主任と相談しています。

たしかに、来年度に校内授業研究を充実させるとなると、行事や校務分掌の見直しも必要になってきます。その作業には労力を要します。しかし、今が学校が変わるチャンスだと考えています。

「変われるのは、今の自分だけ。だけど、目指す方向を明確に示してくれる先達が欲しい。」これが、本校の職員の偽らざる心境だと思います。与えられる研修から求める研修に変われるのではないかと思います。

十月の猿島郡の定例校長会の実践発表の中で、S小学校の校長から「子どもの心に火をつけるのが教員の役目だ。と常々職員に話をしている。」との言葉がありました。この言葉は、自分には「教員の心に火をつけるのが校長の役割だ。」という言葉に聞こえました。



特集2

危機管理体制の整備と学校安全の確保

危機管理体制の整備と学校安全の確保

ひたちなか・阿字ケ浦中　伏見　美穂

先日、今後三十年以内に首都直下大地震が発生する可能性と首都圏での死者の数予想が発表された。あの東日本大震災を経験し、また、最近の台風による風水害や竜巻・雷などによる大きな被害の報告を聞くにつけ大災害は決して他人事ではない。

このような大きな天災に対する危機管理について、日々の学校生活の中での本校の取組について述べる。

一　災害時の対応訓練

避難訓練は年三回行っている。四月は火災を想定しての訓練、十月には地震・津波を想定しての訓練を実施している。そして三学期には不審者対応の訓練を予定している。特に十月の訓練では、隣接する一小一中の関係である阿字ケ浦小学校との合同の児童生徒の引き渡しの訓練を実施している。今回で三回目となり、メールでの通知や迎えの車の導線と駐車場所、そして引き渡し場所と方法等がしっかりと定着してきている。また、訓練に参加できない家庭への対応等もスムーズに行われてきている。その他、災害発生時に被災地との電話連絡が取りにくい時を想定し、被災地の方との連絡・安否確認ができるという災害用伝言ダイヤルを毎月一回職員が交代でメッセージを録音し、保護者がそれを再生し聞くという事を実施し、いざという時に利用できるように努めている。これは、年度始めの保護者会で説明し、この連絡方法の利用について周知を図っている。

二　日常における事故対応

生徒たちは落ち着いた学校生活を送っており、特に大きな事故は起きていない。自転車による通学生徒は三十％弱であるがここ十一年交通事故は起きていない。だからこそ、起きた時にあわてないために事故発生時のマニュアルを見直し、周知し、養護教諭と担任、そして職員が連携し対応できるよう日常の中で確認している。また、新聞に掲載された学校事故等の記事については、切り抜いて職員に配布し注意を喚起している。

大震災から約三年が経過し当時の不便さや苦労が薄らいできている中、その意識をもち続けることは大変ではあるが、当たり前のことが当たり前にできることの素晴らしさを、生徒と教職員ともに自覚させ、常に危機意識をもち生活できるよう指導にあたっている。

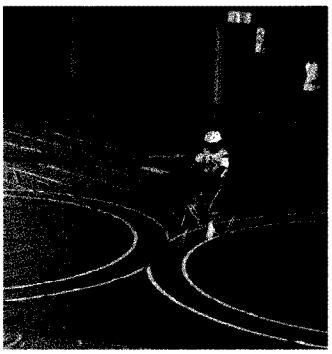
子どもの安全を取り巻く課題への対応

常陸太田・郡戸小　井坂　文雄

本校では児童全員が徒歩通学であるが学区が広く、中には一時間程かけて歩いてくる者もおり、登下校中の交通安全及び不審者等への対応が大きな課題となっている。さらには、自然災害に加え、遊具による事故等の生活安全、食物アレルギーへの対応など、子どもの安全を取り巻く課題が顕在化している状況である。そのため、安全管理と安全教育の両面から以下のことを重点化して取り組んでいる。

一　子ども自身に安全を守るための能力を身に付けさせる。

学年に応じた危険予知・回避能力の育成のために体験的な学習を積極的に取り入れている。例として、教職員・児童が教室にそろっている時に地震が発生するという前提に行ってきた避難訓練を休み時間に設定し、周りに教職員が居ない場合でも自分の身を守ることをねらいとした。事前指導では、文科省の防災教育教材を活用し、「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない場所」に身を寄せることを理解させた。避難訓練以外に、交通安全や不審者対応でも可能な限りロールプレイング等の体験学習を取り入れている。



二　安全点検の徹底による環境整備を行う。

施設等の安全点検では校内を四つのエリアに分け、チームで行っている。担当場所は固定せず、月ごとにローテーションを組み、全ての場所を全職員で確認し、使用停止などの素早い対応を心がけている。

三　緊急時の体制の整備充実を図る。

定期的に危機管理マニュアルの見直し・改善を図り、危険等が発生した際に、教職員が円滑かつ的確に対応できるようにしている。来年度入学予定児に食物アレルギーを有する者がおり、保護者の理解を得ながら、関係機関と調整の上、マニュアルに加える準備を進めている。

四　家庭・地域との連携による安全確保の強化を図る。

登下校の見守りの協力依頼のために安全ボランティア等に毎月始には下校時刻一覧を配付したり学期末には緊急避難の家への訪問による情報収集を行ったりしている。また、防災面での理解啓発のため昨年度は大雨による災害から身を守るための防災教室を合同で開催した。

本校の自慢として交通安全子供自転車大会への取組がある。市内大会では今年度十連覇を果たすことができた。自転車の正しい乗り方の練習を通して交通安全への意識が高まっており、安全教育の推進のための一助となっている。

危機管理の見直しと児童の安全確保

かすみがうら・新治小　羽成　行雄

学校や児童をとりまく様々な「危機」に対して、自校の危機管理を絶えず見直していくことが求められている。かすみがうら市との連携を基本に置き、本校の取組の一端を述べる。

一　「いじめ」問題の危機管理

「いじめ」問題への最善の策は未然防止である。かすみがうら市では、各校の児童会・生徒会が中心となって、「いじめ防止フォーラム」を全小中学校で実施している。これは、いじめ防止とともにフォーラムを保護者や地域の方に参観してもらうことで、自校のいじめ防止策を地域に広げ学校の取組を理解していただくことも目的としている。

本校の取組としては従来の人権集会を見直し、いじめをなくすにはどうすればよいか各学級で話し合い、話し合ったことや学級で作ったいじめ防止標語を発表する機会とした。

二　登下校中の危機管理

①体験型の防犯訓練の実施

本校では毎年防犯訓練を行っている。本年度は体験型の訓練により児童に具体的な身を守る方法が身につくと考え、実施した。

・人と話す距離の体験
（逃げられる距離）
・大きな声を出す練習
（助けてー）
・大人に助けを求める練習

②「一一〇番の家」訪問

子どもを守る一一〇番の家を通学班全員で訪問し、昨年度のお礼・本年度のお願いを伝え、お手紙を渡してくる活動を行っている。本年度はさらに班員の自己紹介を盛り込み、一一〇番の家の方との面識をもつことができるよう配慮した。

③通学路安全点検

毎学期通学路の点検を下校指導時に児童と職員で行って、危険箇所についての具体的な指導につなげている。本年度かすみがうら市と各学校が学区内の通学路点検を行った際、通学路安全対策アドバイザーから指導を受ける機会があり、本校でも通学路の安全について新たな視点をもつことができた。

三　防災の危機管理

①学校防災連絡会議について

地域との連携により防災力強化を図るこの会議について、本校では隣接する児童館との連携を強化していく方向で検討を進めている。

②学校としての備え

昨年度末かすみがうら市より、各校が災害避難所になった場合のために防災倉庫が設置された。本年度、本校独自に児童用として飲料水と簡易食料を備蓄した。

安心・安全な学校を目指して

常総・菅生小　高島　好実

はじめに

現代の社会情勢は、想定外と言われる不慮の事故が多発している。自然災害による甚大な被害、不審者による無差別な襲撃、暴走車両による事故等、すべてが生命に関わる大惨事となっている。そのため、今学校では子どもたちを守るために危機意識を高め、組織立てた取組が求められている。本校でも様々な危機的場面に備えて危機管理体制を整備し訓練に取り組んでいる。

一　危機管理体制の整備

常総市では、学校防災推進委員会が組織され、各学校では学校防災連絡会が設立された。

本校では、地域とのパイプ役として区長さんや子ども会育成会の代表者に協力を依頼して連絡会を設立した。その会合時に校内の引き渡し訓練を実際に参観していただき、今後の課題等を検討したり、地域内の災害時における予想危険箇所や避難場所の問題点などを話し合った。

二　危機管理への取組

①交通安全・不審者対策

・交通安全教室の実施

警察官やスクールサポーター、交通安全母の会を講師として、低・中・高ごとに、「正しい道路歩行」「自転車の実技訓練」「交通事故の講話」を実施している。

・交通指導・地域巡回

朝の交通指導は、毎朝ボランティアの方々にお世話になっているが、本校は全保護者が当番制で放課後に毎日地域の巡回を行っている。子どもたちの交通安全指導や不審者対策に大いに役立っている。

②避難訓練の工夫

様々な災害訓練の中に、生活時間帯も加味し、休み時間での避難も実施し、また、体験を重視した煙体験・起震車体験・救助袋体験も実施している。

③健康安全面の対策

食育指導の中には、食物アレルギーの知識や対応の仕方も必要である。児童のアレルギー状況の把握は、保護者と担任だけの連携ではなく、学校全体で周知することが重要である。本校では、養護教諭を中心にアナフィラキシーショックの知識やエピペンの使い方等についての研修会を実施した。

三　おわりに

学校の危機管理のスタートは「教職員の危機意識」にある。危機意識のないところに良い環境は生まれない。教育現場では、いかなる災害をも想定した上で工夫をこらした教育活動を進めていく必要がある。児童にとって、さらに安心・安全な学校を地域と共に構築していきたい。

提言二題

PTA活動で思うこと

大子町PTA連絡協議会
会長　石井　敬貴

先日、大子町校長会広報誌を読む機会がありました。その中で、たくさんの研究協議会への参加報告がありました。また、町内でも様々な委員会等の活動があり、校長先生をはじめ先生方が参加されていることを、PTA連絡協議会の一員となり初めて知りました。本当にご多忙の中、私どもの活動に深いご理解とご協力を頂きまして、深く感謝申し上げます。

車社会の進展で、児童生徒の危険要素が増加しています。また、少子高齢化により、児童生徒が減少し、少人数での登下校が増えている現状を踏まえ、大子町では、児童生徒の安全な登下校の確保を目的として検討協議会が行われました。その中で、学校や保護者だけでは限界があり、地域の方や関係機関・団体との連携協力が不可欠であり、今後ますます少子高齢化が進むことが予想されるため、町全体での協力と連携を求めていくとの提言がありました。特に、人口の少ない地区にとっては、学校・保護者そして何より地域との連携が、子どもたちを守るためには必要だと思います。

現代社会では、急速な情報発展を遂げ、子どもたちの睡眠時間は明らかに少なくなっています。以前に聞いた講演の中で、睡眠時間が少ないと、その日勉強したことや出来事が整理されず、記憶に残らないそうです。早寝早起き朝ご飯が推進されているように、子どもたちの健やかな成長には、適切な運動、調和のとれた食事、充分な睡眠が必要です。こうした生活習慣を身に付けるためには、家庭での果たすべき役割は大きいところです。そのためには、私たち親が、子どもの生活習慣に関心をもち、共に考えていくことが大切だと思います。文部科学省の調査結果によりますと、保護者の生活習慣づくりに対する意識が高いと、親子のコミュニケーションの時間が長く、朝食や夕食を子どもと一緒に食べ、保護者自身の起床時刻も早い傾向にあるそうです。しかし、私たちも日常の仕事や家事に追われる毎日です。意識して子どもとのコミュニケーションを増やしていかなければいけないのではないでしょうか。

PTAの活動で私が思うことは、PTAは私たち親の学びの場だと思います。子どもたちが日々成長するように、親も学ばなければならないと思います。子どもたちは、無関心なようで、親や周りの大人達の行動を見ているものです。親が変われば子も変わる、の言葉のように、まず、親である私たちがPTAという学びの場で一緒に成長していきましょう。

市P連にできること

日立市小・中学校PTA連合会
会長　志摩　邦雄

まず日立市小・中学校PTA連合会（以下、日立市P連）を紹介します。日立市P連は、市内四十校（小学校二十五校、中学校十五校）の単位PTAで構成され、県内唯一の連合会組織として、各PTA会長は生涯学習、未来、情報のいずれかの委員会に所属しています。また、母親委員の代表をもって母親委員会を組織し、活発な活動を行っています。これらの活動を支えるため、事務局と幹事局が置かれ、幹事局は日立市P連の知恵袋として、委員会活動はもとより私たち役員も支えてもらっています。そして、ご意見番として顧問、監査役の監事で組織されています。詳細は、情報委員会で作成しています日立市P連ホームページをご参照ください（http://www.net1jway.ne.jp/）。単位PTA、特に会長さん方に活用してもらうことを目的にしています。内容や使い勝手等でご意見を頂ければ幸いです。

さて、日立市P連は「子どもたちの明るい未来のために」を合言葉に、単位PTA会長さんや役員の皆さんを通して、私たちPTAに役立つ情報を届けたり、子どもたちの育成に関わる実践的な研修会等を企画・運営しています。その主体となるのが委員会です。生涯学習委員会では、本年度県北地区指導者育成研修会を主管し、未来委員会では市教委等と共催し、教育講演会「子どもの夢をかなえる子育て」と題して長友りえ氏（長友佑都選手の母親）をお招きし、教育講演会を実施しました。情報委員会ではホームページ更新の他、広報誌「みらい」を発行しています。また母親委員会では、母親の参加を募り食育や命の大切さ等について研修しています。特に「お弁当の日」の意義を訴え、各校で「お弁当の日」に取り組んでもらい、その輪を広げています。

本年度は日立市学校長会からお声がけいただき、課題研究推進委員会の全体研修会にPTAも初めて参加しました。日立市P連副会長（母親委員長）が、パネラーとして「日立の教育について」意見や日頃感じていることを述べさせていただきました。子ども達を取り巻く様々な課題に対して、学校と家庭が連携をすることは不可欠です。今回、学校の経営者たる校長先生と課題を共有し、市全体として取り組んで行くことを確認し合う場を創れたことは、大きな成果だと思っています。個人的には、教科担任制や家庭学習の習慣の確立等の他、パネルディスカッションのコーディネートや進行等大変参考になりました（平成二十五年度研究紀要：日立市学校長会参照）。

人事や組織運営面で課題はたくさんありますが、子どもたちの明るい未来のために単位PTAの役に立ち、PTAの代表として他機関と力強く連携する日立市P連でありたいと思います。

特別寄稿

日々の活動の大切さ

水戸市教育委員会
教育長　本多　清峰

現在、いじめや学力向上など学校に係る問題が各方面からさまざまな角度から指摘されています。しかしながら、時々、学校を訪れてみると、一生懸命教えている先生や熱心に学んでいる子どもの姿があります。本当に尊い姿だと思っています。

学校に勤務していたとき、ある学年主任の先生が「毎朝、自分の学年の生徒全員と挨拶をする」という自己目標を立て、日々実践をしていました。あるときに授業が始まって程なくした頃、登校していた○○君の姿が見えないと報告してきました。すぐにその先生も含めて学校周辺を捜し、無事その生徒を見つけることができました。私はその先生に「毎朝、先生が全員と朝の挨拶を地道に行ってくれていたので、迅速な対応ができました。」と感謝の言葉を伝えました。また、土曜日の夕方など、人気が無くなったグランドを何気なく見ていると子ども達が下校した後、部室の施錠を確認している顧問の先生の姿がありました。

日々、このような地道な活動をしてくれる先生の存在が学校を支えていると実感していました。当時の私も、そうした日常の地道なすばらしい活動に気付ける校長でありたいとも願っていました。

現在、学力向上が本市にとっても重要な課題でありますが、人の目を引くような派手なことよりも、挨拶がきちんとできるようにすること、毎時間、子どもの前に立って一生懸命に教えることなど、日常の地道な取り組みを充実していただけるよう、本市内の教職員の皆様にお願いしています。

研修報告

全連小三重大会に参加して

古河・古河第一小　倉持　博

台風二十六号の影響をものともせず、第六十五回全連小三重大会が十月十七日・十八日に、三重県営サンアリーナを全体会場として開催されました。本県からは吉澤一喜団長以下五十五名が参加しました。本大会では、「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進～豊かな未来を切り拓き、夢に向かい、共に生きる子どもが輝く学校経営の推進～」の大会主題のもと、研究協議が進められました。

一日目の午前中は、開会式、文部科学省講話、全体会が、午後は、十三の分科会に分かれて研究協議が行われました。私は、第十二分科会（自立と社会性）に出席しましたが、活発な討議となり、大変勉強になりました。

二日目は、萩野慎二氏（「はやぶさ」プロジェクトマネージャー）、曽田浩氏（モビリティランド社長）、原大樹氏（マジシャン）を招いて、「輝く未来への夢と絆そしてイノベーション」というテーマでシンポジウムが行われました。児童の夢を応援し続けたいと思いました。

全日中福井大会に参加して

笠間・福田中　山崎　利一

十月二十四・二十五日に福井市で第六十四回全日中大会が開催されました。助川公継団長以下三十八名の校長先生方と共に参加しました。本大会では「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」の大会主題のもと、研究協議会が進められました。

一日目の午前中には、全体協議会において、全日中提案、地区提案の二つの発表がありました。午後からは八つの分科会に分かれ、私は、第一分科会の「特色ある教育課程の編成・実施～小中連携、一貫教育による特色ある教育課程～」に参加し、実践的・具体的な事例発表を聞くことができました。

二日目は、全体会で大会宣言文の決議の後、福井県ふるさと大使の大和田伸也氏から「ふるさと福井と夢の実現」と題して記念講演があり、時代劇「水戸黄門」にまつわる数々のエピソードを聞くことができました。

協議会、講演から学んだことを今後の教育活動に活かしていきたいと考えます。

ひばり

「冬の君田中学校」
高萩・君田中　征矢　眞一

社会保障と教育の距離感

那珂・菅谷小
後藤　哲也

ＰＩＳＡショックから十年、日本の子ども達の学力は以前の水準を取り戻した。教育現場の対応策が速効性を発揮したのか？一方でいじめ・虐待等の問題が常態化し、発達障害傾向の子ども達が増え続けている。このままいけば日本の教育は頭でっかちのＫＹ人間を量産するのではないかと心配になる。

これまで主に学力向上のお手本とされてきたフィンランドには、赤ちゃんと両親を手厚くサポートする出産育児相談所「ネウボラ」が日本でいう中学校区に一つ位ずつの割合で設置されている。そこで保健師が一人当たり約二百人の０～６歳児の妊娠相談・産後の回復・子どもの発達相談・育児不安やＤＶなどの家庭問題までを継続して対応している。

個々の観察記録は五十年間保管され、子どもの小学校入学時には各学校へ送付する。転居すれば移転先のネウボラへ送る。両国の子育てへの公的支出のＧＤＰ比は三倍以上の差がある。

下吉影河岸

小美玉・下吉影小
海老澤　稔

下吉影の地は、江戸時代から明治の前半までそこを流れる巴川を利用した水運の河岸として栄えました。下吉影河岸は、慶安四年（一六五一）、磐城平藩の今村甚兵衛が水戸藩の了解を得て河岸を開き、串引（鉾田市）との間に舟運を開始したことから始まります。

当時、各藩は領地と江戸との二重生活を強いられており、資金を得るための米などを江戸へ送る必要がありました。東北の諸藩は太平洋に沿って南下して来ますが、海岸線が単調で何らかの時に避難できる港がない鹿島灘航行と岩礁が多く難所である銚子から内陸に入ることをきらったのです。

平藩の舟は那珂湊に入港すると、川舟に積み替えて涸沼に入り、湖岸の海老沢または網掛に陸揚げし、下吉影まで陸送します。下吉影から串引までは小型船で運び、串引で高瀬舟に積み替えました。それでも陸送距離の短い下吉影河岸を選ぶ者が多く、仙台、三春、松前なども平藩にならい、下吉影河岸は栄えていったのです。

そう言われれば

高萩・秋山中
大澤　吉雄

先日、先輩の先生方と話をする機会があり、納得してしまう話に出あった。

一つは、「子どものわがままの始まりは、親が『今日のご飯は何にする』と、聞くことからだ。」である。自分が好きでなくても、親がつくったものを家族と一緒に食べることは、自分の思い通りにならないことを経験する絶好の機会である。「我慢」ができなく、「耐える」ことのできない子どもを育てた責任は大人にある。この子どもがこのまま大人になっていくとすると、どこかでこの連続を切りたいものである。

もう一つは、「子どもの多くが『ありがとうございました』の言葉を『どうも』に置き換えて使っている。」である。前者の言葉を発するときは意識せずに頭が下がるが、後者では頭を下げることができない。言われてみれば、会話の中で後者の言葉の方が多いように感じられる。心を込めず、言葉だけにしてその場を取り繕うとするには最高の言葉である。しかし、これもどこかで切りたいものである。

地域の子どもは地域で育てるという。地域との交流の場で、話題にしてみようと思っている。

閉校に立ち会う

行方・玉川小
飯島　英一

校長室には、この学校の歴史を語るものがいくつか掲げられています。「明治七年創立当時の八幡寺　井上小学校」の図があります。作成されたのは、一九八三年となっていますので、比較的新しい作品です。作者も当然、その風景を目にしていないはずですが、隣に掲げられている大正四年調製の「玉川尋常高等小学校図」を元に建築の専門家が復元したものと思われます。清々とした教場が描かれています。

時を超えて現在、新校の運営検討委員会が役目を終わろうとしています。校名や校章、校歌のこと、スクールバスの運行について、体操服や生活の決まりなど、多方面にわたって調整されました。六校の小学校を統合させる新生玉造小学校は、それぞれの持ち味を融合させ、益々光り輝く地区のシンボルとなることを期待しています。

玉川小学校もいよいよ閉校いたします。終末に立ち会う縁に、万感の思いです。

地域の特色を生かして

稲敷郡・大谷小
朝日向　栄一

大谷小学校は、美浦村で西南部に位置し、ＪＲＡ美浦トレーニングセンターが学区内にあります。このため、三年生が乗馬体験を行います。

県南地区では唯一の吹奏楽部があり、三年連続でディズニーランドでの演奏をしています。

各教室には、ＩＣＴ機器が整備され、授業で十分に活用しています。子どもたちに授業が分かりやすいと好評です。

科学が好きな子どもの育成にも力を入れています。授業の研修もさることながら、霞ヶ浦環境センターやミュージアムパーク等の機関との連携や地域の企業や人材を活用した体験活動も多く実施し、保護者や子どもたちに知的好奇心を育む取組をして好評を得ています。専門家による授業では、普段見ることができないカブトムシなどを見る授業、霞ヶ浦の湖上体験やプランクトンの観察などができさらに理解が深まります。また、保護者の方々も興味をもち、学校の様々な教育活動に参加協力してくれています。

今後も学校・家庭・地域の連携にたち、希望をもち未来を開く子どもたちを育てます。

我以外皆わが師

北相馬郡・文間小
藤岡　洋子

「我以外皆わが師」これは、私が大変お世話になった先生がよく話されていた言葉だ。

四月に校長として赴任してから、折に触れて頭に浮かぶ言葉である。今までも思っていたことだが、自分は周囲の方々に支えられ教示を仰ぎ仕事をしている。それは、子どもたちであり先輩、同僚の先生方、保護者、地域の方々である。

何処でも、誰にでも遠くから大きな声で元気に挨拶。姿勢を正して人の話を聞く。そして、はっきり返事ができる子どもたち。何事にも子どものことを一番に考え、朝誰よりも早く出勤し、教室に風を通し、冬には暖を取って子どもを待つ。登下校に必ず地域を見回る先生方。学校のため、子どもたちのためにと、あらゆる場面で快く協力をしてくださる保護者や地域の方々。様々な場面で見られる姿に学ぶことであり、自分が何をすべきか考えさせられる。どんな時でも、誰にでも自分もこうでありたいと思うことである。

それぞれに関わる方々が「自分の師」。このことを忘れずに、しっかりと自分の職務に邁進し、学校経営をしていきたい。

おもてなしの心

筑西・鳥羽小
谷口　みづえ

海外研修の機会をいただき、晩秋のドイツを訪れた。十二日間の滞在中に、多くの学校や教育機関等を訪問した。どこでも、十一時間以上かけて、遠い異国から訪ねてきた私たちを温かく優しく迎え入れてくれた。

ある基幹学校では、ランチに生徒たちが醤油ベースに煮込んだ具をたっぷりかけたご飯を作って、私たちを熱烈に歓迎してくれた。和食が恋しくなりかけの頃で、その懐かしい味に皆、感嘆の声をあげた。手作りの竹細工のランチョンマットも心憎い演出であった。特に、午前中に授業が終了しているのにもかかわらず、最後まで笑顔を絶やさず対応してくれた先生方や生徒たちに心から感謝している。

東京オリンピックの招致のプレゼンで、日本人の心を「おもてなし」の言葉で表現していた。ドイツの空の下で改めて「おもてなし」について考えてみた。相手に対して「心を向ける」「心を巡らす」ことの大切さをしみじみ思う。冬支度のドイツで、温かい心に出会った。

勇気ある言動

坂東・内野山小
荒木　郁子

本校では、隣接している内野山運動公園で、毎日「仲良しオリンピック」として、業間の休み時間に、一周四百メートルある遊歩道を全校児童が走っている。走る距離は児童により違うが、誰も一周以上は走っている。

十一月のある日、運動公園に行ってみると百個以上のゴルフボールが散乱していた。前日男の人二人が、金属バットで打ち合っていたのを目撃した児童がいた。その二日後にも、二十個ほどのゴルフボールが散乱していた。近くでグランドゴルフをやっている老人クラブの人たちに、先日行った収穫感謝の集いへの協力のお礼と共に、危険なので、注意を喚起したところ、思わぬ答えが返ってきた。

「私ね、夕方散歩していたら、若い男の人二人が、金属バットでゴルフボールを打ち合ってたから、注意しておいたから。ボールも拾っていくように、言っといたからね。全く小学生に拾わせるなんて、とんでもないわよね。」

勇気ある老婦人の言動のおかげで、以後ボールは落ちていない。

読んでみませんか

「計算しない数学」
作者　根上　生也
発行社　青春出版社

書店の「大人のやりなおし数学フェア」という見出しに足が止まった。「５００mlの缶ビールの縦の長さと胴回りでは、どちらが長いでしょうか。」という問題につられてつい読んでしまった。他にも図を見ただけで、計算しなくてもそれとわかる問題があった。そう言えば子どもの時は算数は苦手ではなかったはず。解けたときの喜びも覚えている。いつからわからなくなったのだろうかと固くなった頭を揉みながら読んでみた。

神栖・矢田部小　中薗　正秀

梅のかおり

―先輩校長から―

なめんなよ いばらき県

前・水戸市立
三の丸小学校長
小坪　健二

茨城県は、都道府県を対象とした「魅力度調査」で、三年連続で最下位になってしまった。県民の一人として、非常に残念な結果である。本当に魅力のない県なのだろうか。まだまだ知られていない魅力がたくさんあるはずである。茨城の魅力について、再度認識し、誇りと自信を強めたいものである。

茨城県には、筑波山、霞ヶ浦、袋田の滝等の自然や太平洋に面して延長百九十キロに及ぶ海岸線等、豊かな自然に恵まれている。また、四本の高速道路、茨城港や鹿島港、茨城空港等、陸海空の交通網も整備されている。さらに、「研究機関数」が全国一位であることから科学立県の魁としての存在でもある。

全国ランキングにおける茨城の自慢は、温暖な気候を生かして農業生産額が全国二位ということである。特に、メロン、レンコン、ピーマン、栗等の生産量は第一位、レタス、白菜、梨等も第二位である。海面の漁獲量も第五位であるなど、食環境に恵まれたA級グルメの県としての魅力も十分である。

このように、茨城県は、自然や科学、生活環境、さらには、歴史や文化に恵まれた全国に誇れる県であり、正しく「なめんなよ　いばらき県」なのである。

共に悩み！共に克服！

前・水戸市立
笠原小学校長
黒澤　祐一

生徒指導や教育相談を長く続けてきた。問題行動を起こす様々な子供に対して、夢中で指導を始め、うまくできたりできなかったりの連続の中、教育研究所等で教育相談・生徒指導を専門に行った。今年の三月末をもって退職し、水戸教育事務所学校教育課生徒指導班に再任用として勤務させていただいている。生徒指導について最後の振り返りをしてみる機会を与えてくださったのかと思っている。

人生には思うようにならないこと、いやなこともたくさんついて回る。小・中学校時代、非行にはしったり、学校にいけなかったりする子供の行いは、思うようにならない苛立ちの行動でもあり、苦しさの行動とも受け取れる。教員生活では、攻撃的な子供、内向的な子供等、様々な子供たちと関わり、子供の行動を心配する親の相談を受けては共々に悩んだ。一緒に悩んだ親や子供からは、成人して「元気にやっています。」と賀状が届くと当時を思い起こす。

今は学校を離れているが、子供の悩みや悲しみを分かち合い、子供の将来に期待し、子供と共に歩んでいる先生方の情報に接するにつけ、水戸教育事務所から「共に悩み！共に頑張れ！」と応援している。

未来へ

前・常陸太田市立
瑞竜中学校長
中村　和幸

退職して早くも一年。現在は、週三日程の市教委勤務と自分の時間を楽しむ日々である。

現場を離れ、改めて教育に携われることのすばらしさや幸せを再認識させられている。どのような立場にあっても教育者として本気で子どもたちと向き合うことの幸せは学校でしか味わえない。現職の教師には、このことを肝に銘じ覚悟をもって悔いのない教職人生を歩んで欲しいと心から願っている。

今でも脳裏に焼き付いて離れない光景がある。最後となった我が母校、瑞竜中学校の生徒たちが集会等で生徒会長を中心に「校訓」を唱和する誇り高き姿である。そこには生徒と教職員が目標を共有し、一体となった教育活動の源があった。

グローバル化が避けては通れない今日、日本人のもつ思いやりの心に加え、子どもたちには自信と誇りをもたせることが必要だと思う。日本の教師は優秀である。是非、教育の力で世界に秀でた日本人を育成するとともに明るい未来を子どもたちに約束したい。

失敗できること

前・鹿嶋市立
三笠小学校長
錦織　常雄

私の前職が教員だったことが分かると、その場にいる人々と教育談義になることがある。

その後、自分の話した内容を振り返ると、現職の時に比べ、断定的で確信に満ちた口調と内容であったことに気付く。昨年の三月までは、とてもそこまでは口に出せなかったようなことが、平気で断言できてしまう。

退職したので、今後学校教育の現場で失敗する心配がないからである。その点、現職の校長先生方の場合は結果を無視することもできず、判断に迷い、思い悩むことも多々あるはずである。しかし、苦労以上に、成果が現れ、子どもたちの笑顔と成長を見守ることができるという、現職のみに与えられた得難い特権もお持ちである。

教育に関しては、全ての人がまさに千差万別の意見を持っているが、往々にして、結果責任を問われることのない人の意見は、確信に満ちているものである。参考にはしても惑わされず頑張ってください。いずれ、不安が確信に変わる日が必ず誰にもやってきます。

素晴らしき仲間

前・土浦市立
下高津小学校長
倉持　宣昭

昨年三月に退職、縁あって茨城県教育研修センターで週四日の勤務をしています。

そうした中、先日、大学時代の下宿の同窓会がありました。同窓会といってもわずか四人、しかし、卒業以来三十七年間毎年続けてきた同窓会です。

私以外の三人は民間企業勤務であり、彼らの話からは、民間企業の視点を様々な面で感じてきました。特に強く感じた言葉は、「公務員は給料が保障されている。民間企業は利益の中から給料が出る」でした。公務員にも当然厳しさはありますが、民間企業には及ばないのかもしれません。

そんな語りを続けた四人が昨年退職しました。仲間三人はそれぞれ、経営危機に陥った企業の再建、発展途上国での運輸ビジネスへの参加、小さいながらも貿易関係会社設立と、第二の人生をスタートさせました。

そして私の再スタート、校内研修支援訪問では、授業参観や研究協議を通して、学校の研修力向上に関わっています。また若手教員研修では、講座参加者の一所懸命に、「頑張れ、でも困った時こそ組織の力が生きるんだぞ」、そんな思いで若手教員を応援しています。

健康が一番

前・石岡市立
府中小学校長
岡野　晋一

昨年四月から公民館で仕事をしています。ここでは、多くの方が講座や同好会等の活動を通して、趣味を楽しんだり、研修を積んだりしています。高齢の方の利用も多く、「館長さんは若いね」なんて言われると嬉しくなります。学校勤務の時は、児童から年齢を聞かれると返事を濁したりしていたのに。そして、皆さんから元気パワーをもらっています。

一方、学校では道徳の教科化や小学校の外国語活動の拡大、全国学力テストの結果公表等、新たな時代を迎えようとしています。校長としての責任は益々大きくなり、心身の疲労も増します。職員の健康を守る前に、自分の健康管理をしっかりやってほしいと思います。

ある先輩から、「退職後に亡くなる人が結構いるんだよ」と聞いたことがあります。そんな言葉を信じてかどうか私は、今の仕事に就いて低山登山に興味をもち始めました。息をハァーハァーさせ、頂上に着いた時は最高の気分です。まだ登ることが精一杯で、自然の景観を楽しむ余裕は少ないのですが、健脚のためにと挑戦しています。最近は、仕事休みの日に自宅近くを一時間程散歩し、新しい町の様子に気づいたりしています。

電話相談室から

前・結城市立
結城小学校長
塩森　茂郎

四月から、電話相談員として勤務している。「いじめ」や「体罰」と思われる相談も何件か寄せられる。「欠席が続いていた時、プリントがくしゃくしゃになって郵便ポストに入れられていた、いじめではないか。」「家の子のジャージがなくなった。犯人を捜して欲しい。」本人のことを考えたら、保護者としては当然の訴えである。更に話を聞いていくと学校は何もしてくれない、先生方は事件を隠そうとしている等対応に不満が出てくる。

学校の対応を聞いてみると、本人から話を聞いたりアンケート調査をしたりして解決に向け努力している姿を感じとることができる。保護者の訴えも学校の対応も、どちらも真剣になって問題を解決しようと頑張っている。問題は、保護者と学校の両者の「真剣さ」がそのままの形でそれぞれに届いていない所にある。ここに、保護者の学校に対する不満が生じ、学校もどうして電話相談にまで発展するんだろうという思いを持つことになる。

学校も保護者も、願うことは共通して「児童・生徒」の悩みや問題を解決していくことにある。このことをお互いが理解し合うことができるよう、両者の「真剣さ」のつなぎ役に徹していきたい。

子育て支援

前・下妻市立
下妻小学校長
須藤　芳夫

退職して早二年になります。この間、市役所の子育て支援課で家庭相談員として週三日、子育て支援のお手伝いをしています。

学校現場で教育活動に携わっていた時には、いかにして子どもに生きる力をつけていくか、子どもの人格形成にいかに関わっていくかなどの視点で関わってきました。しかし、今の家庭相談員としての立場では、子どもに対する支援だけでは問題の根本的な解決にならず、保護者に対する助言、指導等が必要な場合が多いため、保護者も含めた支援により子どもの福祉を図るという視点が必要です。そのため、一般の子育て支援サービスをはじめ、虐待の未然防止や早期発見を中心に取り組み、子ども達がいかに安心・安全に保護され養育されているかを見守ることが期待されています。

毎年、小さな子ども達が大人から虐待を受け、尊い命を落としている事件が報道され心を痛めます。親の養育怠慢（ネグレクト）によりやむなく児童養護施設に入所しなければならない気の毒な子どももいます。

年に何度か、保育園や幼稚園・小中学校を訪問して、気になる子、気になる家庭についての情報交換をしています。この時に子ども達の元気な姿を垣間見ることができ、懐かしさが湧いてホッとします。

この国の将来を背負っていく子ども達が、よりよい家庭環境の中ですくすく育っていってほしいと願っています。

市町村教育委員会と学校長会

北茨城市

市教委との緊密な連携を基盤に

北茨城・華川中
山崎　慎哉

本市学校長会は小学校十二校、中学校五校の計十七校で構成されている。本市教育委員会は教育総務課・学校教育課・生涯学習課からなっている。本市教育長は、「敷居の低い教育委員会」を標榜としており、市教委に足を運びやすい雰囲気があり、市教委と校長会は日常的な連携がなされている。以下に、市教委との連携の一例を紹介する。

一　定例学校長会議

本市学校長会では、毎月定例の学校長会議を開催し、教育長、学校教育課長から講話をいただいている。教育長からは、主に国や県の最新の教育施策等の情報、学校教育課長からは、市の教育行政の動向や服務規律の確保についてお話しいただいている。お二人の講話を受け、私たち校長は、学校経営の指針とするとともに、教職員に伝達し、市教委と学校が思いを一つにして、教育活動を展開できるように心がけている。

二　学校長会夏季研修会

毎年七月に、学校長会研修委員会が担当し、今日的な教育課題をテーマとして「夏季研修会」を実施している。今年度は、昨年十二月の県中学校長研究協議会で常北中学校落合武校長が発表した「接続期を重視した小中連携教育の推進」を基調提案として、五つの中学校区における「小中連携教育の現状と課題」について協議を深め、教育長をはじめ五名の教育委員からご意見やご指導をいただいた。

三　学校長会からの要望書の提出

学校長会では毎年十一月に各学校から出された要望を集約し、次年度の「教育環境に関する要望書」を市教委に提出している。市教委からは教育長、教育次長、教育総務課長、学校教育課長、学校長会からは会長・副会長と行財政委員長が参加し、教育予算の有効な執行について協議し、学校長会からの要望を市長に伝えていただけるよう依頼している。学校長会としても、様々な要望をするからには、市からの教育予算を、学校や児童生徒のために適切に執行していくことを再確認した。

四　教育長訪問及び計画訪問

年度当初に、教育長が市内全校を訪問して、学校経営全般についてご指導くださっている。学校教育課による訪問指導は、計画訪問Ⅰ・Ⅱと諸表簿調査訪問の年三回行われている。計画訪問Ⅱは、生徒指導訪問を兼ね、教職経験五年以内の教員には再訪問指導をいただいている。これらの訪問指導を通して管理職や教職員の資質・能力の向上を図ることができている。

本市学校長会は、今後も市教委と緊密に連携し、「一人一人が輝く活力ある学校づくり」に取り組んでいきたい。

鹿嶋市

市教委と学校長会の連携による教育推進

鹿嶋・鹿島中
松岡　重喜

鹿嶋市学校長会は、小学校十二校、中学校五校の計十七校から組織されている。学校長会は毎月一回定例会を開催し、教育委員会からの指導・連絡及び協議、校長会・教育会関係の事業の確認、学校経営上の課題の協議のほかに、テーマに沿って研修会を実施している。定例学校長会には、教育長、部長、教育指導担当参事が毎回参加し、教育長の考えや教育関連事業、行事の説明が行われ、教育委員会と学校との共通理解を図っている。また、その後の研修会では、「幼小中連携の在り方」をテーマに、各中学校区を単位に三年間の研修を重ね、幼小中連携事業を推進している。

教育委員会では、学校との連携をさらに密にするために、次のような教育委員による学校訪問を行っている。

一　各小中学校ＰＴＡ総会時に保護者への講話（学校への理解と協力依頼）の実施
二　地域公開時の学校訪問
三　新任校長校及び隔年ごとの学校訪問の実施

また、毎年度始めに、幼小中学校長を対象に鹿嶋市教育指導方針の説明を行い、市教育目標の共通理解を図っている。さらに、学校が教育目標の実現を図りやすいよう、要望に応じ、次のような各種事業を実施している。

一　小学校一・二年生に対して市教諭を配置し三十人学級を実施
二　学習指導補助や特別支援教育推進のためのＡＴ・ＴＴの配置
三　学校図書館教育推進のための図書館司書の配置
四　小学校教育課程特例制度を活用しての小学校全学年での英語教育の推進（ＮＬＴを全学校へ配置）
五　学力向上推進のための外部講師を市教委予算で招聘しての授業研究の推進

このように、教育環境を整えるため鹿嶋市教育委員会では多くの人的支援を行っている。また、教師や保護者の教育力向上を目指し、研修機関として「師範塾」を設け、教職員や保護者のための研修を実施している。

幼小中連携事業の推進については、学校長会が中心となり、毎年事業の拡大・充実を図り、幼小中学校間の関係を密にしている。今後は、小中一貫教育を推進するための教育計画を教育委員会と連携して作成していくことになっている。

このように、各学校では教育委員会との様々な連携・協力を通して、充実した教育活動がスムーズに進められている。

本市学校長会は、市教育委員会と緊密に連携を深め、本市教育の充実と発展に向けてさらに努力していきたい。

編集後記

毎年厳冬になると、夕陽に映える筑波山が見事です。会員の皆様の学校からの眺めを思いつつ、第二二八号をお届けいたします。本号も、たくさんのご寄稿、ありがとうございました。